

常山紀談

七

函 番 號	21	號
種 別	國	
種 別		號
月 日	3219	號
日 月 日		

919.5
338
Vol. 7

滋賀縣立
常山紀談
學故藏書印

常山紀談卷之七目次

- 一 前田利家末森城後卷合戦の事マヘタトモイヘスエモリノ
- 一 利家鳥越城を攻らる事トリコエ
- 一 本多重次強諫の事ムゲツタガウカニ
- 一 秀吉 東照宮と和を乞まらる事ニハ
- 一 東照宮聚楽もく秀吉公と御對面の事シユラク
- 一 本多正信遠謀言上ニサムブエンボウの事
- 一 東照宮伊豆もく小條父子と御對面の事イヅ
- 一 信長公平手政秀を惜らる事ヒラテニサヒデ
附 小瀬甫菴信長記ホラゼホア
- 一 太閤記を著しタカウキの事
- 一 謙信信玄二將の批評ケンシンシンゲン

常山紀談

七頁

一 甲陽軍鑑 虛妄多し事

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

常山紀談卷之七

備前國 湯淺新兵衛元棟輯録

○瀧川一益佐々成政等信孝を推崇して秀吉と弓矢をとり

小天正十二年九月成政八千此兵を率ひて加州金沢城主

前田利家の士大将奥村助右衛門永福後伊豫がせしる所の能登

比末森の城を囲む成政旗本を以て後巻体押へ厳しく

攻る此城どうも打破らば能登ハ一日小付後ふたり後巻を

まかりし衆取ること下知しりり奥村僅に三百計の士卒小

て爰を詮度と防ぎしるふ強う強く攻らまて今ハ是

やぐぐく自害せんと云々しるし助右衛門が妻小袖をかいた鉢

巻を一刀を横と女房の粥を桶に入させ堀裡の人々

よ自ら欲せ昔楠とやん云一大将の日本國を敵し
城を籠りしりしと云明日ハ金沢より後詰のいへき只一
夜防ごまくと云く打旦を奥村足てり此振也男子に
優まより此城を女の力よく持得人ハ口信と自負の意あり
此城もやとく落べりしを見て火攻よせんといふ老將也
東改のやく大守の城門をたて富山の城門といふべし又
石動山の穴徒も吾の心を合夜火攻よハさべりしと下
く既よ二三の丸を攻取て夜のぬきを待居りし末森より
金沢へ行程九里計を自酉の刻よ此と告く夜此明るよハ
堅くちりしべしとや送る利家聞もあへば金沢の城ハ廣
間へ出利長を咄ぐ汝ハ城の留守せよと下知せし利長

いやく真先うけく佐くを打破るし残止らん事思ひも
よらばとやされたまは利家さるバ父子打向ひ敵の不意を
討し利あらん軍兵を整ふ及ぶべりし馬に鞍どし重りし
ハ一騎がけし打出し一足も疾もを今宵の功とすべしと
富田共五郎後越し汝津幡小形も不破及三よ末森の後
巻の先手せよといへし下知せし富田已が若し馳帰る
馬引かし打撃諸鎧を合せくかけたり利家士卒も
汁をかけて飯をくくし物具せし庭ハ黒の馬を引立
しり利家の北の方後芳三方よ此しを入父子よあせられ
扱人くせまへ我ハ利長の母たり今日の後巻ハ誠ハ大事の
軍ありし各心を合せ功名し終へ末森を敵よ取まらば

各々も討死し多く我も人手よかりひまどとして利家の側
近く進みより末森を敵攻落しなば討死せざるも利長も
母が此河を能聞きよ生死の別なきなりといわれしが利家
あし心よや成政を打破らん事必定なりといひもあへば物具
の上帯を結ぶる端を切て捨てる事打乗父子の兵五百
計よるさうりり利家馬上より味方の小勢ハ吉事なりと
佐々がさひもよるさうりり切てかり打勝なり奥村討せ
なば生かひなりと云つ津幡の町を北へ打過らまると時
富田乗来り津幡ハ津波より四里餘りの行程なり利家
汝いづる寝て有るぞと罵りしを富田は津幡に
馳付不破が門を叩きし液し不破物具忌めしを見てお

出りへばとや門外に旗を指せしひぬ何困より寝すべきと
いふ利家尚聞入るより一ハ富田怒て其日此一番鎧を合せ
くり是利家士を激すの術ありし利家の士卒退く馳
付れば三千餘り成るを二陣に分一隊ハ敵の後より打か
す一隊ハ敵の旗本を突くかゝる成政軍兵疲るし上名ひ
考らざるよ奥村も門を突く打ておしバ成政大に敗
北せり是天正十二年九月十一日の軍なり後より成政は
尾崎を越敗軍を集め陣を立並し見よ今前田といふ
男が猪も乗陣を乱しかり来るべし大にしりし
利家を打取べしとて物見二騎を遣せしが乗帰して敵を
城と後よあて静やかへりかり来るを物見二騎を遣し

しつゝ成政謀違ひたり

未盛後卷の事加越合戦記に足る一変大同小異に
詳あり故併せく爰に記すと利家ハ加州の内石川北能
登全州を治め全沢の城より成政ハ越中の守護して秋川
郡富山の城より越中立山は越の難所を僅に
從者百計よそ忍びく打通東美濃へ出秀吉と織
田家の弓箭大敵よりやすく勝るがごとく成政小國に
攻登りて前後より挟打て秀吉を亡くさんハ
加賀能登越前三州を賜はりしと信雄は相約し
を越より富山に歸り佐々平左衛門神保安藝者と
相計り成政の二人此女より中一人ハ秀吉へ人質に出

し置たりは其妹を利家の二男利政に妻とせしむ
平左衛門とて言せりハ両家縁を結び目出度とつひあ
り天正十二年七月廿三日成政の使佐々平左衛門を
祝ひの物取扱へ相贈りたり利家篤実の人なれば成政の
奸謀もともあはれ引出物して悦びの上村井又兵衛を
謝禮の使とせしむ成政八月八日思ひとて延至夜半の櫓
よそ軍評定せしむ心付く密に利家よそす
者あり利家虚実弁へしとつゝ急りて不意に
変小打負るハ弓箭より身の耻辱なりとて加越の堺朝
日山に城を搦へ村井又兵衛を大将とて千五百餘り
守らるる人々を柵を付し八月廿八日成政より佐々

平左衛門前野小左衛門は五千の兵を指添て押寄り加賀の者が居住のまなせんとく金沢に帰るも有く折首七八百よ八色ざりてはまてとも村井大判の考て味方を勇め立ち知り利家馬場の士阿波賀藤八江見茂十郎見画し糸合せしが急ぎゆりて注進を頼むやと云々れば西人色を變り金沢よりありとも斯る事成すべし来るべし糸合せしこと幸あるも然るも一くゆれとりあるやると怒りてまじりて村井井守て後母し事悦ぶしゆりも但し路次し一揆起り人ハ必定たり各歸りに恐あはば爰に止られよと云へば友人此詞を承て扱ハ路の一揆を恐りて帰るなりと云へばかけゆて

申さんとして馬に打棄金沢へ四里半計ありを只一時に弛ゆり野にせバ利家さへバ後巻せよとて不破彦三田野村三郎四郎片山内膳園島春三郎原隠岐武助十郎たむと打具し貝を吹せ搦りゆんでぞ急ぐれりおれも大雨降るべ成政の兵も一時に攻破せしめやとひん城を攻むりて引歸りぬきよと和談破まらば能州七尾よハ利家の弟五右衛門安勝同孫左衛門良継高畠織部中川信六長九郎左衛門等三千余りとの能登加賀越中の境未盛し奥村助右衛門千秋主殿助土井伊孫を添て千五百計のめりれり加州津幡の城よハ前田右近越中の堺鳥越よと目加田又右衛門丹羽源十郎を遣られり

成政も俱利伽羅の嶺の城を構へ佐々平左衛門二千餘利波
の城ハ芝野小左衛門二千青木の城ハ國士菊地伊豆守
荒山ノ城を築き神保安藝氏春の老袋井隼人
ちりちり七尾の押と神保ハ成政ハ智なり四千の兵を
りく森山をちりちり利家形と秀吉ハ告らむとれを
秀吉聞く佐々を疑ひ加州ハ又左衛門を置つハ吾謀りし
ハ違ハざりたり利家兵少くとも必成政ハ切勝なり
頃て師をわし成政を討亡すとて使者ハ黄人三千
兩与へらぬ九月十一日成政末盛へ押寄せ二里計かとの
坪井山ノ切所を前ハ當て陣ハ佐々平左衛門山下を八前
野小左衛門を始とて八千餘攻ハ外構の町あり火をか

かんといふ土井伊豫敵ハ町を焼きてハ生ぐひなりと
二百斗ノ突て出ぬと戦ひれども大敵ハかけ合せ
終ハ討死と城兵も爰を去途と防ぎる間迷ハ落べ
ともアえざりハ成政後志心えりとて神保安藝
氏春ハ四千餘を差添て川尻とつあり陣ハ加州の道
を塞だり利家末盛より告ありとて金沢を打
立不破彦三村井又赤傍を先陣とて

一説ハ成政まびり攻て二三の丸水此子を争とり本
丸ハ攻諾り末森の形勢息切らむり金沢ハ池袋
ハ文系を投りしとて
十一日末の刺れ事ハ末盛ハ水ハ度岡の水を汲てさる

よ入^イ急^イき追^オ付^チよ後^ノ半^ハの土^ツ産^チせん^トぞ下^ノ知^ルせ^ルも^シく^ル借^シ
回^シ松^ノ仕^トり^の所^を注^スり^し三^ノ里^計隔^リて^は利^長居^城なり^ハ
と^しく^も末^森へ向^カい^ます^とい^ふ言^ハ送^ラら^せり^し金^次より^ハ四^里計^ハ
か^りら^る津^幡の城^へ多^ク見^テ押^付られ^しバ^ハ弟^の右^近秀^継廓^ノ
外^ニ出^向ひ^利長^を待^テる^べき^ヤと^いふ^まり^しバ^ハ城^ニ入^り
し^リ利^長成^の刺^さり^し津^幡池^邊ま^りり^し利^家悦^んで^吾
成^政と^若き^以り^し数^度の軍^ニを^つま^しり^し利^家を^越
し^しま^り一^度も^あら^ばけ^しま^りも^成政^悔る^べき^ハ非^也も^シ
毎^ニ毎^ニ一^合戦^して^ハ勝^利を^得ん^事掌^中に^あり^し
大^音揚^て呼^びり^勇と^進め^しる^ふ寺^西治^を入^道右^近
と^相議^して^ハ末^森ハ^落し^しる^ん殊^更川^尻上^に保^保

多^ク勢^を加^へて^ハ塞^がと^つえ^しバ^ハは^はい^しん^とも^シ
利^家大^ニ怒^りて^ハあ^らば^ハ必^ズ口^も出^しる^事也^ト
と^し人^ハ一^代名^ハ末^代と^もし^け奥^村や^土井^を捨^殺して^ハ
已^来中^之日^本の^主と^あり^しも^シ此^ノ恥^辱は^はく^べし^し成^政
政^大軍^もあ^らば^ハ吾^馬也^り計^しま^しも^シ快^ク軍^して^ハ
勝^負を^交せん^事不^足な^りし^ハい^ふは^ハ村^井汝^ハ何^とあ^らば^ハ
そ^の一^戦と^いひ^定め^して^ハ何^をか^けられ^しバ^ハ吾^馬
聞^もあ^らば^ハ有^毎の^一我^ハ外^何の^是非^なら^んべ^きと^いふ^ハ利^家
悦^んで^ハ村^井が^心も^吾と^同し^して^ハ早^折立^まし^して^ハ右^近泰^漬
飯^を進^め且^土手^に占^領の^山伏^せん^召て^ハ軍^を占^領せ^し
ま^りや^と同^し利^家も^もよ^ろく^と夫^とと^いふ^ハ也^ト

りり五十計の山伏なり懐より書物をとる也利家も
あま後巻に決定しし能くしといふまじし山伏書
物を懐に入し今日吉日なり時も吉時なりといふ利家
汝功者なり頃て打勝交員とべしと快げし打出勇進
んで押せしむる村井不破先陣原隠岐前田又次郎片
山内孫二陈田中村常四郎青山与志近友善左衛門
田慶次郎押續く又川但馬武者身許きりといふ川尻
のこれ一里計を松といふやうして利家曹を取て着忍び
此緒乃竹うしを切捨られしは今日を限り
軍よしく入しはきくゆべしといふひもよるは篠原勘六
とて利家の近習れ士二十三は根を頼ひ起す

公に但せばされども是れお立しとせし汝汝ハおさ
しとく吾討まなバ堅く城をちりて秀吉の後巻を待へ
叶はばハ耐腹を切と下知をいしはははりくるが乗物
又乗興力お士二十騎打具し川尻近くぬく池付篠原勘
六急んひぬと大音の呼をりは是を聞人々天晴剛の
者たりと云あへり川尻よりハ津幡よ人を付てうら
まじしと弛帰て前田父子津幡まで知れどもは是を
ししとハおえはといふをゆて神保ハ大に備をゆるめり
利家先陣に乗行て村井不破に渡際を一騎打しるの吉
を忠せいうも勢し押通ましと下知せしは神保ハ兵を
押知し待かけしと物見の云しは又富田越後といふ
七八

を物見とせしむる能く帰て敵ハ一人もいれ川カハの杭カキの多く
以て人と見誤りしるなりとて押し合はれんとす
利家川杭と何を證せんシヨウと問ふに越後されば武者
さへ並びの拵ソコひまをまじと存シホれも悦タカしん為
川中まで馬を打入る心算小見ては是を見損ミソん程
たつら再び弓箭ユミヤハえやうとす利家汝が見る所こそ
正タしき士サホシの年本アホシとせよと悦タカしりサテ兵を進めて
押通オシトホふ神保をば爰ユメも知シラむ後オクまとして付ケられ
利家ハ今演イニハといへる右の上なる山小兵を押し合オシツケせられ
一ハ夜明ヨルしれば利家馬を奪ウバひ兵糧ヒヤウを奪ウバひ
今日の軍儀イニハぞたる心易ココロくべしと下知シしこれ馬よ

と下カり爰コく見ミまは利長七八百計リヤウ先陣セン千三百
計旗ハタをひるはるスギと利家リカの軍イクサ功イサ名ナせん
等トハ分ワて賞シヤウをば若モシ討ウチ死シせば必カナラ子孫シソンをミ救サはは
とすスら下知シせしス夫ツより山ヤマを下ツりて兵ヘイを遣スひ
道ミチ二筋ニ筋スジ一筋ヒトハ末森モトモリのミ一筋ヒトハ成政ナリマサ旗ハタをへノさる
村井坪井山ムライノへ押オシ合アヒ成政ナリマサを虜トリおせんトす利家リカツテモ尤モト
なれども成政ナリマサ必カナラ嶮ケンを前マに當アてや陣マすスんト只タ末森モトモリへ地チ
付敵ツキを退崩オウし城中シヨウの考カウせし力チカラを付ケんハいクは村井ムライ兼キ
と可カ然ニし城中シヨウの士シども只タ今イマの仰オホセを兼キてス辱ウチし
とより程ホドなく末森モトモリ近く押オシ合アヒせられバ村井ムライが考カウた陣マ多タ
首ウデを取ウ来クる末森モトモリハ二ニの丸マをコりテ千秋チキウ主殿ヌノ助タケノ信ノブ

金右衛門已下寄手攻入るを追出しか力の限で戦ひつゝが討
死餘多し及べり本丸も既し危く見ゆまじども奥村助を
少も氣を屈せざり支戦ひつゝ又も砂山より南へ朝霧乃
晴るる利家のころ印見えり力を得勇に悦ぶる大方
ちりびしり少く後巻まくりせ城陥るべきは運を定ま
し八偏小利家神速の兵機を知られぬなりなり村
井又兵衛田村三郎四郎を始りて鎗を打入散り
戦ひつゝが成政先陣のちね佐と手左衛門松村井突伏け
まじバ士三十餘人枕を並べて討死す利家の先陣佐とを
討取関を作らうけ切崩せりバ寄手敗小しつゝ松
利家見て搦手へ思ひれり寄手小も究竟の兵隊多

有て待りけりれば利家旗本五十騎むり静まかり
つゝ亦も半田中を先す先す一番鎗と名ふる
所を櫻甚助鉄炮よて打ちりりバ左の手におと鎗
を抱て傷まじり半を傷とまふハ後弟なりり指物
よて見知りぬ甚れも中を傷たつてハ不便なる
を志しつゝと涙を流しつゝ後ハ聞えりりや利
家敵の鉄炮烈し延々せバ叶ふやどしどし追
合戦もあき競ひかりり押崩れ空の隙多討して放
小せり六金沢の士幾関をぞつとぞ上りりり利家城中
小乗入て奥村とぞつとめ詞をかけ今度薨城の働云

の及ぶべしありあはる利家いふおりのあはるも汝がいのし甲斐なく
て城をぬらう又攻落さるるまは口惜くべきよかり功名や
まゝといさめあらはる其時孫村傳き傍山崎友成を度
鎗を合せしりとして二の争論せり利家半田が真先が
いふ冥加なく海軍負志を遂げれども勇士は志ハ
頭をれしり二士二回鎗を合せきれども付き名なきた
まは一番をば孫村に極めしりぞと下知せしれ二人は千
石の加禄を与へらまはるし我々中々樹ハ疵いりて二千石
与へ士十五人と力に付しり成政の旗本へも後世の
いふやえりいふは一軍せんとして八千計押出し利
家はをりては勇めり勢ハ百万もあれ恐る不足は

先陣ハ又を傳せし二陣ハ城にたれば奥村三番ハ不破彦三
と定めしり能州の國士長九郎左衛門四五百計して
馳來り敵味方分ぬらるるまは物見をやらし長が兵なり
まゝに池付しり口惜く事あり弓矢の眞理に
いふ憤アをとお見の腹田を左衛門孫村七を傳せて馳
歸り奥村中セバ利家長を感ぜしり事大方なるは皆
いふ長志を廢立まは勢を後まじりしり非淺
うらむる誓いと誓紙を添しり書を長に与へしり成
政いふ思ひり人打出しり兵を引しり山に添て引退く
折しも武老修治しり來り居しり年多三弥ハ無二
無三よかり成政を討取べしと云れども猛將の成政

かまよばくもそんテガロ軽く引拂ヒラカひくれとんニヒとてバ付慕ツキモに
して止マシまりり討取ツル首七百ニ三トとぞサすスり利家と成政
城を攻落セマセトさばホをニ引返カヒさシを怒イカり引退ヒクく体タうして
津幡ツバタの城へ号ヨセんも計ハカりガ罪タとして奥村を城ニ止ト免ヒ兵ヲ
餘多アホク拵シ並ニて末森を打ウちマりニ追オヒくニ兵カ加ヘりニ一ニ万ニ計
一ニ部ニより又不破フカ村井を先陣ニとして濱邊ハニに指サシがリ津幡
小馬をウらマりニ成政ハ津幡ニ押寄オシりマりニ引ヒきマり
佐々が軍兵キ金のキのキの指サシ拍ハりニまバ坪井山ツボ六カ曜キきマりニ
アリてハんニえマりニ利家ヲ詠ウめアてマ見事ヲあル備ヲ立テて
成政を攻セ亡スり我士卒ニ拵シりマりニ言ハりマりニ秀
吉ニ此勝利ヲをウりマ日本ニ比類ヲ少クたシ功ヲとイふセれマりニ

利家奥村ニ其日持マせレ馬印ウマ金の切裂キれ再イおシマシり
まシり甲曹カウを賜タりマりニ賞シマシりニ

○天正十三年四月八日前田利家合カ合ハをウりマ鳥越トリの城へ押寄オシり
鳥越トリの城ハ合カ合ハをウりマ兵ヲ入リ置キりマりニ去ク年ニ末ニ森ノの所
城を明退アケて成政の軍兵入リきマりマりニ利家ヲ是ヲをウりマりニ
攻落ウさんトれ志ヲたリ城兵も久瀬但馬守其ヲ撰ヒりマりニ
五百計門モをウりマ突ツて利家の先隊を追ツ立ツる利家ハカりマりニ
山の尾崎ヲ陣ヲして馬を立タりマりニ味方敗ハすルを見ル
山崎ヤマの所ハ如何イかニやマりマりニ合カ合ハをウりマりニ
終ヲらぬニ白ハき羽織ハをウりマ進スりマりニ者ノの所ハ利家山崎
知ルるニ早ハ味方ヲ勝ツりマりニ旗本ハの早ハ味方ヲ勝ツりマりニ

者どもがけおんとすもを敵の勢競ひあがりて是の踏止ぐら
時なり今おし待りてと下知せし徳山五兵衛只今津を合
しとてえんころ地煙立いと云りなり近き越中其
城より助牙く敵の陣ハ馬もろれども山崎が与力警津九
藏と名乗鎧を打入しりまかからまへ左なる九藏危
しといども山崎静まこと云詞中九藏傷まこととて
山崎をともかく鎧を打入押崩して城懸やで退打あり
アたり城兵門を指固えられた利家強て攻めりて返れ
ぬ此軍の前利家北近習の士九里少藏勘気をあつ居
が成政馬廻りの將杉江彦四郎と組打して谷へ戻組し
杉江刀よもをうけしをさして下より少藏小脇指とて具足

鎖のともを刺通し剣返しつれども氣つうれて首を取
を得ざりし片山内膳が役卒末で少藏を押し相討
と云くそをえり利家細やうに事を糾明して少藏が功
名に定り助牙をゆるし鞍馬馬を与へらまはり

○天正十三年三月 東照宮液松の城より疔を病せまひ近習
の若き人膿を強く押せまひふより痛む甚しくすて不
事切をせまふと城下はハヤ々々御の事なりと今ハかうと思
召らん御遺言を仰おされし本多作左重次ありて先年
臣を療養せし糟谷政利入道も長閑が菓を付させしれよと
りまじも閑し召入させまはざりし六作左衛門大に怒り殿を
徒に死しり人よ此作左重八年老ぬれば只今自害して待

奉るる座を立ちたるを御座とていふは作左衛門氣狂ひと
ころ未だなくくくく自害とハ何事ぞ吾たうく人後こそ大事
なまこと信じてし時作左衛門夫ハ人よりその事よは若む時より
幾度ともなき軍場ハ救ケテの手を負世世中の時といふ時を
身一人しかばねひぬ今日まで殿の御情こそ人かほくもいへ
只今殿をせしむるハ小條を始として敵國より攻来らん
殿にぞこれよりたうくく守する者やいへま困ハ忽滅亡まじし
其時作左衛門ハ路の邊に餓死せんたうくくハあれこそ徳川
家ハ公セー本多作左衛門よ何を頼まよわなうくくたう
人ハ嘔り笑ひて近き武田の内にて其利友とて人の
敬ひくくく武田の運尽めれば今ハ本多平八郎が組となり

かやう居るといふも哀なり是ハ人の上なるに勝頼の不
道よて滅しころも殿の茶をきくひもあも同し理よいよせ
東照宮尤として長宗を召領て茶をちり灸を大うして
作左衛門も急ちりたれば夫より痛くや軽くなせむいれ
他た悲し声を上泣く悦びいと我
○天正十四年正月秀吉織田源五郎長益羽柴下総守勝雅天
佐左衛門三人を使とて 東照宮よ和平を乞まきたり三人
帰て和平をいもよほど重て来らバ首を切んと徳川殿やされ
一由中入る又かきこめて三人を三河へき強く和平を請せらる
東照宮三河の吉良よて左のよ鷹を居させむひて三人
よ御對面あり三人申さるハ信雄卿の厚恩を忘るることの事

ハハリも秀吉計畧一澁川三郎を誘ふ羽柴の姓を与へ下
 総守より一神戸の城主と一三万石の加禄一其外数多都二妻
 子を置自人質と成れひぬさあぐの謀ハバ此度和睦ハバ
 秀吉軍を引一清洲より勢揃してお向ふべき事なり四國中
 の兵も相加りり去る年小牧の時より兵十方も多りしを
 引一し事よひとせられバ 東照宮より召去年十月伊勢
 の合戦より伝雄々と和子の時止方にも已来別の事あり
 なるも云々も我を事とせざるの謀もく吾家の石川伯耆
 十方石与へて我よ背をせり吾弓箭を取て愛向せんと云
 一しうも織田家の國を打てて軍せんすいふと怒を押へて
 止めふ無礼の事ともなり秀吉清洲より勢揃せんことを全

ひ西をれ鳴海表より一軍ありて一然るは東兵洗ふお
 しく土岐遠山と三郡を切取て一とてもちと指上らるは
 鷹一ありて一配せりて一打笑ハせりハ三人降て秀吉
 よかきしり秀吉さてさそ大勇將くれ今夜思慮さる
 と云まし一丹羽長重進も必軍ハお止り人長重が士も
 刀の鞘袋を設け一女子細を問上鞘上三つまたを拵へ合戦の時ハ
 鞘袋を捨て三河武者に銘を命を助るべき支度なりと申
 も果ぬ蒲生氏郷堀秀政もこれく士卒にせり得る方
 小一も利ハすといへ秀吉より一徳川家をお破りて各小
 見せんおとて止りれば三人退出しそして彼様ハ死所な
 くておとねやと私語より翌日諸將をあつめ三河を打滅

さんハ安んれども智勇の大將なれば吾日本を治むべきを
相談せん為縁を絶妹を嫁して和平せんとして又三人を
まづくは 東照宮三ヶ條の誓文を御前を秀吉許諾
て和平し及ばせむひたり四月秀吉の妹濱松におちりて
後上京小登らせむべきむゆを秀吉信じて秀吉の母大政所
を質とせしむるく都上登らせむべきは定まり長臣
とも是ハ危き事と知るる中治め申せども聞召入
りぬす中治めハ和平又破れし秀吉攻来りとも素より
鉾先の強きハ云ふや及びいへき何十万此大敵たりとも折
りしド強て思召止りぬると申れば 東照宮聞召徳ら
を理ありされども秀吉畏きて折れぬはあはれ日本久しく

兵乱よて四民安堵せぬ此頃や治りぬる不復秀吉と弓矢を
とらばいつの世よりハ勢溢せん只とく秀吉は對面して日本太
平の基とせん若危難し及びたりぬるハ万民の命は替らぬ
何う惜うべきとて九月廿日濱松を治りて途ありぬる定
りぬるハ人々北日ハ四ヶの悪目とて千人出て一人も不帰と
せぬ一日津延引然るべりぬる 東照宮千人行てて
大事もあはれ我今度一万二千の軍兵を引具へ上京此軍兵
一人も生てぬるハ吾為の大仕事なりとて仰られぬる井伊直
政を御前居とて此度秀吉許諾を構へ変え及ぶも危くし
尾張大納言信雄ハ必吾に告知せて味方たぬる一子羽五郎を
秀吉に恨めしハ心を合せぬ其外吾に志をもちぬる人々去

ども我も亦其備あらんや秀吉不意の謀をなさんば
京都の火をかけ東寺の楯籠るべし其時素より立至る我
母が組一万を五百づつ二十に分ち外に酒井柳本が今度京上り
供の外留置し兵一万是も二十に分ち佐屋の渡を越千種を
押上るべし若大津より支るなれば武田四郎が長篠にてあり
如く切てかゝらば上方武者一支もさへなく又瀬田の橋を焚
きりて宇治より攻入るべし新七籠之介と云角力な二人は宇治
の案内者なれば召具もべし斯のめくなくば秀吉聚樂を退て
大坂より取ん所を東寺と清水と両方より接く打破らん
恐るるは是ぞ秀吉詐妄の謀をなさば吾天下を掌に振るべき
兆たりと信じて歸り馬者秀吉と御對面事故なく歸らば

のひかりはまは危し〜はあ〜召れり〜故に万民の命小
替らんとの流河天地神明も感應して遂に國運を永世に
うせむひら〜ふ〜ぞ

○東照宮聚樂して秀吉と御對面食礼ありり日秀吉白き紙
子の羽織は繡あるを著られり

蒲生氏郷其頃三十二歳より狐紙子と名付呼ま〜とあり
浅野彈正長政彼羽織を所取をり〜私語々ま〜と

東照宮漫一人の物をめ〜ひ〜事なり〜と仰あり長政又法所
望ひひまは秀吉大に悦ま〜素此羽織ハ物の具れ上〜と
んと設た〜ま〜一日ハ辞〜中〜を強て乞得させ〜れあ
秀吉何事の悦うを〜増〜べた〜と志ひ〜せバ 東照宮止事

を得むして許容まじりてり儲聚楽の城門もて毛利浮田を
始々居並びてお福一さて茶を奉て後 東照宮彼羽織の
事を仰せされし秀吉悦びてふづり著せたり扱大名は向
ひ我の物具させりとの事なつてや誠上天の冥加と叶ひし
秀吉ありしを後しれり 東照宮帰らせりひく後長
孝了聚楽の事と浄物が有りありし時吾の羽織を贈り
て後秀吉吾の物具させりたとの志たりと諸大名に向ひ
く云ふハ斯る後ハ争う秀吉の鋒先に向ふべしと中國要
と強りつごえついで普く世人れ口より一築紫の末まで
聞えらん是天下の大名小威を示すの謀畧たり其遠大の謀
輒く測るべきよあつた力を以てを推んとするとも及ぶ

秀吉ありされども吾志は別く有るを仰あり

○太閤 東照宮を餐礼ありしにかけ盤を始め器は茶の所紋

を厨給り滅すをを次子なりしを 東照宮本多
正信の後々せりひめあり思慮やあらん吾も亦遠く慮を

きりりし信れり信ありされば小笠原と八郎氏次を

勇将の誉も世上は閑ふてきもも旗下ははげむと志

有る氏次同心はて御家の旗下仰し後ひりひと彼が内との

志ハ信長と朝倉と一戦有ん時必三河より伊加勢より伊加勢

なり其隙をとりし御家の領國ハ巴ヶ掌の内より振んと

存りて偽て二心あり有松よりひり彼が計ありぬ姉川の合

戦信長援兵を乞まると小笠原を先陣に命せられし心中

挟む所ありしに、も辞さざりて、姉川にて勝軍
かゝりて小笠原が二心を体よん、さうして、清盛のたがう清盛の
乗せしむる所ありし、姉川の先陣小笠原と御定み、て彼が
支度相違せり人の乗る所をのぞき、て、さうして、一物も、て、い、乗る
交を乗るが、て、乗ぬ心あるを善と、て、豊臣家の乗る所を右の
謀としてあへ、さうして、せん、る、も、さうして、て、い、れ、バ、東照宮を
かゝりて深く信し、る、さうして、

○東照宮の御女を小條氏直迎へて西國和平るれども御對面
さうして、さうして、天正十四年三月使をめて拜謁して要言國境の
城々守りの兵を輟らば、一、美瀬川を渡り伊豆の、さうして、さうして、
仰遣はされし、酒井忠次黄瀬川を越、越氏政父子の御對面

り、ひらば、小條氏の旗下は属し、て、今日、徳川家八五
州の、は、あ、さうして、さうして、小條氏の旗下は属し、て、徳川家の、
かゝりて、後、め、り、以、東照宮され、バ、其、位、争、ひ、無、益、の、る、さうして、
さうして、比、武、田、上、杉、和、平、と、て、犀、川、を、隔、て、對、面、の、時、馬、よ、り、さうして、
さうして、さうして、方、旗、下、は、似、き、り、と、て、忽、事、起、り、其、場、よ、り、渡、炮、を、步
合、諸、卒、血、を、染、て、相、引、よ、り、さうして、其、時、信、玄、廿、七、才、謙、信、十、八、才
の、時、さうして、夫、よ、り、和、平、と、て、京、を、け、り、て、さうして、信、長、も、吾、も、争
う、支、へ、得、べ、し、其、を、さうして、兩、方、は、使、を、以、て、道、理、至、極、せ、り、と、い、は、也
う、は、兩、將、廿、四、年、の、間、和、平、せ、ざ、り、と、其、中、は、信、長、ハ、近、江、和、泉、を
打、後、へ、吾、も、援、を、知、り、て、信、長、を、後、め、り、て、根、を、断、く、す、る、の、謀
を、せ、り、が、信、玄、死、し、て、勝、頼、父、は、優、る、べ、し、と、威、を、さうして、ひ、暴、逆、

して滅亡さるる信長又頼頼の勝りて勝者ト振るよか
事のみろく終つて裁せられぬ勢のめき大將ハ滅て終るよ
せざる事理なり夫を以て戒とせば位争ひをせざるハ悪
るる氏政吾と二心なく云かばさんハ両旗よそ東國を打平
たん其時よ及て州のあまご領する者上座よをん位争ひ更
益あき事なりとて伊豆の三島よて氏政氏直ハ御對面あり
○信長弓箭盛よして畿内を打後へられ比近習の老元備
漸強大よ及びせもの事を知らず平手中務が自害しけるハ
短慮よてひとゆるるを信長怒て色を變ト吾等弓箭を取
事これ中務が傳めて死るる取悔て過を改め故なる
古今よ例あり中務を短慮なりとて汝オが志無下よ口

借

借き事ありとてまじりて
小瀬南菴後よ此事を傳て信長記を編ぶる已前あり
に必其の中よ出入るる事を遅くして残多しとてまじりて
中務大輔政秀ハ備後守より信長の傳に附きまじり信
長甚よろめ事多かりしは度々傳争ひて後國の亡ん
事を料し封の書を留めて自害して失く事世に普
く知されバ具に記さば中務始ハ清秀と云くる友決書よハ
これ清秀と記しこれ後政秀と改めたる故諫死
及信長尾州名護屋よ一寺を建らし政秀寺と稱し寺願
二百石を附せし臨濟閑山派京都妙心寺の末寺よて中
務の墓も其寺よる寺の縁起に政秀墓送の時信長極

をを然らばしるしに記せり小瀬南菴ハ町医まで加州金
沃に居利家の臣横山山城守長知の許り心安く常より来く
毎夜如くしるし長知ハ尾州の人にて織田家の事能く言ふ事
故に信長の事を南菴毎夜尋問且秀吉此事をも問ふ
故長知或は委しく或はあらく悟らざるを南菴退く
事紀し信長記太閤記二部の書を著し世上へ知りては
長知聞て信長太閤の事を忠記さんといふ尋問しるしハ
答んやりの有べきは遺漏も多く残多き事とせしるしを聊も
とせざるに依て只一座の物語に云聞せざるを其後其書
著しるしハ今に於て是迄惚たり南菴馬麻老ありと長
知りしるしにあり長知ハ初浪人にて叡山に寄寓し諸國を

武者修行して後前田家仕へ大膳と云加州大聖寺小松越
中末森あるの軍は武功有て一万五千石候し其後同州太田
但馬守を放付せしむし命を受太田祿一万五千石を合せて
三万石与へし長知大功の人あり人其勇武を以めし目も掲
出大方に事ら称羨もせしが只武士の有べき事と心得たり
し南菴菴は語らるる事遺漏多くて悔みたりと我
○信玄死しし事を述べ隠ししるしに小條氏政泄聞て謙信此
りし告やしるしに謙信ハ春日山より湯漬飯を食せしれ
しは是を聞き打撃して箸を捨飯を吐出英雄と此人
あり関東の弓箭柱を失びしるしに惜まれしるしに謙信ハ將
畧は謙信に及ばざるあり高野の成慶院にて大威徳明王此

法を修し護信を呪詛せしむる其文今も高野山に傳はり
くるといふ

信玄ユウサイ勇才ハ人ヲ超コエしりと稱キクせし父を逐オひ子を殺コロし降コト
將キウを殺コロし其子を妾セフとす其後不仁怨毒フジンフンドク集カへ及ツクば
姑メく此二事を併見ても二將の賢否論ケンヒロンをすべしと明アり
又甲陽軍鑑カウヤウケンカンに記せし処附會詐偽フクワイソウギ志シひて拵コシラへ設けて信玄の
惡アクを隱カクし他を蔑ナカしせしむ是又かそへ及ツクば一事を
奉アゲて傳ツはるる北條ホウテウケ家と戦ふごとくは利有リアリと見えざることも
小條五代記コウゴウダイゴキに記せしハ信玄川中島カハナカジマに陣せしハ氏康夜討ウヂヤヌヨウチして
甲州カフの兵敗ハイボク小幡コハチとせしる旗ハタを拵ステて甲州へ逃入ニゲイリしりと
見えし甲陽軍鑑カウヤウケンカンに是を思イて津浪ツナミに旗ハタを名ナらしむると

記ししりたる小條五代記コウゴウダイゴキの脱誤ダツゴアとありしりも津浪ツナミ
旗ハタを名ナらしむるハ陣所ヂンシヨの地理チリよとありしりも

○甲陽軍鑑カウヤウケンカンを高坂彈正書カウサカダンジヤウカキとせし傳ツクつ事久ヒサし勝頼カチヨリは
仕シへ友野大膳武功トモノダイゼンブクウ人ヒトもて甲州カフの滅ホロビて後引キりり隱カクし
居イる事コトも抑オシへハ香坂カウサカと記キし姓セイも違チガはり偽ギ妄マウ書オホ
ちりし之コトも軍國グンコクの事情ジヤウワウをよく書取カキトるる小其虚妄コキョウウを
人疑ウタガはむ控弦コウケンの家イハ考モトまはるるの古人コジンもいひし然シカし
其事コト實ジツを棄スて其レ偽イナを考モトまはるる大オホに惑マヨはされんる必然ヒツゼン
カフ川中島カフナカジマ九月十日此合戦コノカウケンの事其記キせしよりて是を論ロン
ぢし信玄の敗ハイボクしりし事コトも辨ワカるる卯ウの刻キは始ハジまりし越コト
後方ゴガタの旗カチ已マに刻キは始ハジまりし甲州カフの旗カチも記キせし軍イクハ芝シ

居を踏へし方をして勝とす事甲陽軍鑑に論明白なる
然れども其の戦信玄芝居を踏へられしは
既ニ山本勘久其軍を豫めいひきりしも二万の兵を
一万二千謙信の陣西條山へ指向け合戦を始めし越後の軍勝
しも負ししも川を越退ん所を旗本三陣を以て首尾を打ん
と謀りしは越後又引返して極事あり是主戦の敵は勝
まばりて空しく其地は有べきなりしを以て是を以て
信玄芝居を踏きまばりて勝とハハりしは是は又信玄
芝居を踏へし方と云ふも云はれしや其糟近江守犀川を後りて
三日留りしを甲州より押寄て軍あり事ありしを以て是を以て

後の軍芝居を踏へし方と云ふは是は二ツ昔老人の扱はりし
云傳へし事なり信玄嫡子義信を殺されしハ継母此言あり
といども其実ハ川中島より信玄義信將机換りし信玄
ハ廣瀬の方へ引退く敗軍といひたり義信を捨殺すべき勢
かりしを義信深く恨むを以て終は不和に及んで
殺しし方と云ふは至りし方なり信玄其場を踏むり能はりし
逃しし方をして芝居を踏し方といひたり是は二ツ謙信素より其
糟を以て川を渡りし後殿と定めし方なり三日留りし方をして
是は甲陽軍鑑に其糟が散乱しと記せしも虚妄あり
事論を待て其糟三日芝居を踏し方と云ふは謙信何事と狼狽し
主役二人を梨山より走らばりて走らばりて走らばりて走らばりて

宛^ニテ^{シテ}計^ルテ^{シテ}め^クら^ル旨^ニ甲陽軍鑑^ヲ記^スル^ル事^ト明^クら^ル事^ト
初^メの合戦^ニ打勝^テ巴^ノ刻^ヲ徒^ニ敵^ノの帰^リヲ待^テて敗^レ走^リ
さ^レる^ル謙信^ノ弓矢^ヲと^リ越^中此^ノ戦^ハハ父^ノの吊^ヒ合戦^ニ
信濃^ノ師^ヲ出^シハ村上^{義清}ヲ救^フル^ル事^ト其^ノ求^ムル^ル事^ト容^テ巴^ノ事^ヲ得^ル
ふ^タら^ズ相^摸北^軍ハ上杉^{憲政}ノ来^ルヲ容^テ巴^ノ事^ヲ得^ル
た^ル故^ニ其^ノ初^メも強^ク勝^敗を^入る^ル事^トあ^ルが當^ラズ^ル所^ノなる^事
で叶^ハざる^ノ戦^ハを^入る^ル事^ト信^義を^入る^ル事^ト大將^ハ可^勝なる^事
よ^シせ^リ爰^ニ以^テ深^ク頼^ムる^ル事^トハ始^メ終^ニ約^スる^ル事^ト又^シ其^ノ兵^ヲ
用^フル^ル信^玄ノ可^キ及^ブ一^ツ山^ノ根^ハ城^ヲ攻^落せ^ル事^ト信^玄氏^ヲ
康^兩旗^ヲ後^援さ^ル事^ト能^ハズ^ル事^ト敵^ノの中^ニと^シ旅行^シ
京^都ノ趣^キも^モ係^トす^ル事^トや^シ信^玄ハ謙^信小^田

原^ノ攻^入判^スる^ル事^ト後^ニ付^テなり^シハ^ナり^シ安^キ事^トは^ナり^シや^シ甲^陽
軍^鑑長^沼ノ城^ヲ築^キま^ス時^ニ判^兵兵^庫ノ佐^州水^内郡^ヲ以^テ百^貫
貫^ノ地^ヲ与^フ信^州戸^隠ト^シ密^供を^修ま^ス爰^ニ北^越ノ輝^虎諺^ヲ
臣^ヲ企^テ以^テ次^ニま^スル^ル事^ト永^禄十^一年^ニ謙^信戸^隠
山^ヲ以^テ謙^信を^佐弔^詛直^筆ノ書^ヲを^入テ^シ打^突ひ^シ弓^箭取^ル事^ト其^ノ
恥^ヲ末^代ノ宝^物と^シせ^ル事^ト神^職とい^フ事^ト中^國傳^ハ今^ノ其^ノ
書^紀州^高野^山ノ有^ル事^ト詳^シニ^シ記^スル^ル事^ト實^ハ謙^信を^佐
恐^ル事^ト虎^ノ如^シと^シも^シあ^ル事^トや^シ村上^{義清}も^シ信^州ノ
帰^リ入^リ事^ト甲^陽軍^鑑ノ載^シと^シも^シ永^禄年^中信^州ノ中^ニ
四^郡謙^信ノ屬^シ義^清を^信州^ヘ入^ラス^ル事^ト記^スル^ル事^トの^リを^シ
甲^陽軍^鑑ノ長^沼長^閑跡^部大^炊助^ニ人^ヲを^奸曲^ノ者^トと^シて^モ

頼龍ヨリキヨせしめし事を治ツカく憤イライまるるハたゞるるの事なれども二人権を取
るハ勝おし始はじめまるるよゆゆ信玄の時より電チカラせしめしれしお勝おし
至いたりて愈いよく権威ケンイ有あき信玄の時小糸コイト北兵キタヘイは跡敗アトバクまき走はしりしと昏こもり死し
愛アイを憎にくむ由よしを甲陽軍鑑カウヤウケンに載のせしむるを以て知るべしなり
云いへし説セツは甲陽軍鑑カウヤウケンを著アケせし本ほんにハ彈タン正しやウよく筆取フデトリハ
楽ガク彦十郎ハヤシロウといふ者なり彦十郎ハ甲州滅おこて後大久保忠隣オホクボチカ乃
不ふよく東照宮トウショウミヤの御事ミコトを去カキ加ムへて一書ヒトシヨとなしきりたり
又マタ或人アルヒトの云いハ川中島合戦カウチシマカウゼンの事を前夜ゼンヤ論ロンじて謙信強敵ケンシンガウテキ
しとのあ對たいしの人數ヒトスズをみてさへ危アヤシきよしして信玄八千ヤチヒト謙信ハ
一万三千マンサンなり勝カチといふも討死ウチシあり有あり武田タケダの各オノ各オノハ
理ことなりといひし事を甲陽軍鑑カウヤウケンに載のせしれバ律カチハ謙信ケンシンはあ

事コト分明フシミなりと論ロンじ人ヒトもなき又同書ドウショに載のせし持氏モチウヂ生ナ
害ガイ兩上杉リウウエスギおこり怒イライまき武州河越ブシウカハゴエまき小糸コイトは負マケし
天アメの罰バチなりといひ持氏モチウヂと兩上杉リウウエスギと時トキ考カウまり持氏モチウヂの滅ウチ亡シ
は永享エイキヤウ十二年ニニヤシの事氏康ウヂヤスとハ遙ハカは百八年ヒャクハチヤシを隔ヒたり同時ドウジに
記キせし小糸コイト早雲サウウンハ延徳エントク二年ニニヤシは相摸サカミし打入ウチイリし上杉ウエスギ
顯定アキサダハ越後エチゴあり顯定アキサダハ越後エチゴ信濃シノウの境長森原サカエナガモリハラあり高梨タカナシ
よけしめ早雲サウウンと兩上杉リウウエスギとぬれを氏康ウヂヤス未生ミナマまじる巳前イセマの
事コトしるを甲陽軍鑑カウヤウケンに記キせし誤アヤマり天文六年テンモンニヤシ丁酉テイウ七
月十五日ツキヒトイハチヒトサタ管領朝定クワンレイトモサタと小糸コイト氏綱ウヂツナと武州川越カハゴエまき夜軍ヨイタマあり
朝定トモサタ討死ウチシまり此合戦コノカウゼンを兩上杉リウウエスギと氏康ウヂヤス夜軍ヨイタマとなし記キせ
しや同十五年ドウジゴトニヤシ丙午ヘイヌ四月廿日シツツキニニヒト持氏モチウヂ五代ゴダイの後古河コカの晴氏ハルウヂと後

領上杉憲政と共に川越して氏康と合戦有て晴氏憲政敗
りたり是を甲陽軍鑑に西上杉と氏康軍とせりされば五代
巳前の持氏をば公方と記し五代巳後の爰領を西上杉とせり
るなり持氏四男成氏成氏の長兄公方政氏なり同人は長子
高基高基の長男晴氏なりといへり又甲陽軍鑑に載る高
名の事ども虚妄多し中より能て再拜をよみ懇て在り
敵を討取て之を得しるは記せし事幾なくとりあらずを想
惣として甲州に敵せし士は取手を手と懸しと名ゆ減は笑
ふべき書の記しはたゞ其作虚妄勝て計ふべしは法も
いも其時居て我玉の勢ひを能知且士の情は達せし
者のおしる書する故弓箭を老の翫ぶべし書して虚妄を

て棄べきははうらま

吾友の松崎惟時が語るは其師ありし宝山流は
術の達人武藤十右衛門の論せしは戦は巧拙有らば
太閤秀吉は戦ひは拙きなり小牧にて十方及ぶ兵
を帥みし東照宮小對陣一減は一及も合する事能
らば東照宮の御弓箭世は猶まきせり論は
及ぶ法も其形原にて甲州の兵と御一戦ありし小
衆寡敵しきた故にや利を失せりひぬさしは位を
海内毎双ともいふべきは謙信と軍する度ごとくは打負ら
ましし是をめて押りし小戦ひの巧拙は遙は其料も
やあられも天下小旗を揚世を治め國を平らにすは

道ハ別ベテよみて戦タカひの巧拙コウセツハよきなりと語りてはと悟ワカり
と我コレノ是タカキ又奇論キロとまへし

常山紀談卷之七終

